

悪魔♀に敗れ、支配されてしまったシヨタ天使たちの国。
悪魔お姉さんたちは、「メスイキでしか射精できない呪い」を
シヨタ天使たち全員にかけた。

「うふふふっ♥ 貴方たち天使にはさんざん手こずらされてきたから、
たっぷりお返ししてあげなきゃねえ♥」

『あ、悪魔め！ さっさと地獄に帰れっ！』



「あらあら♥ そんな生意気な口を利いでいいのかしら？
貴方たちのおち〇ぽは、
もう私たち悪魔お姉さんの
玩具なのにねえ♥」

『あうっ♥
さ、さわるなっ！』



『あ`♥ あ`あ`っ♥』

「ウフフ♥ 今にも
イキそうな感じがする？
でも、射精できてない
みたいねえ♥」

『もっ♥ イクっ♥
イクのに…っ♥
で、出ないっ♥』

「おち〇ぽが空イキして、
いつまでも勃起も収まらないし、
敏感になっちゃって大変♥」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

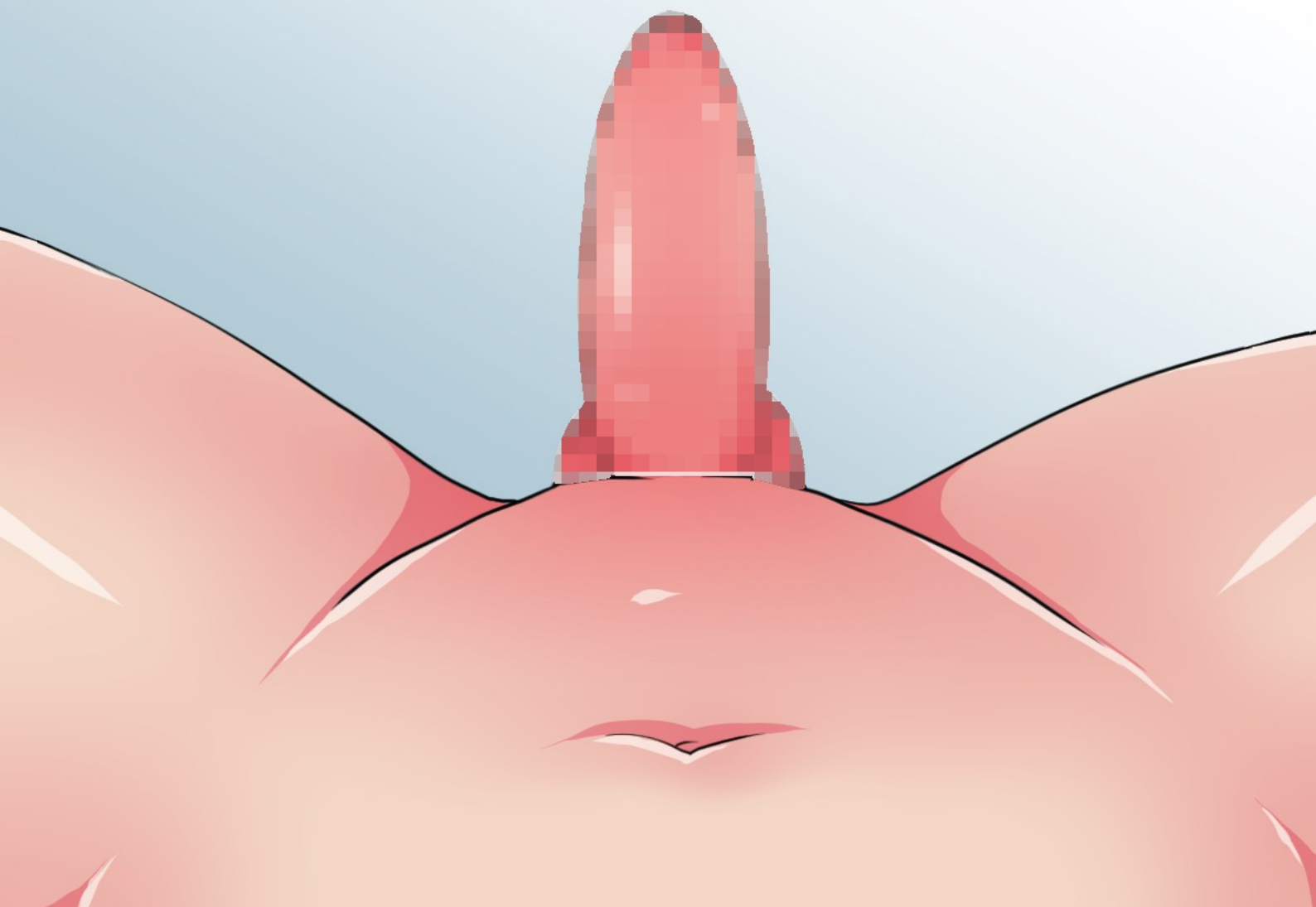
「でも、やめてあげな〜い♥
このまま、つら〜い絶頂寸前をずうっと味わわせてあげる♥
いつまでも我慢汁垂らしながら、おち〇ちんの焦燥感で頭おかしく
なっちゃいましょうねえ♥」

「あはは、天使ってホント馬鹿よね。あたしたち悪魔に逆らうんだもん」

悪魔お姉さんたちは、ショタ天使たちのプライドを挫き服従させるために、それぞれが自分の支配下に置く天使を調教する。

「これからは、あんたたちは悪魔のペットなんだから。
あたしたちがすることに、何一つ逆らっちゃダメなんだからね」

お姉さんはその言葉をショタ天使の身体に、いや、ち○ぽに教え込む。



「あんたたちのち○ぽは、これからは悪魔お姉さんのために使うのよ。
いいわね？」

『ひっ！？』

悪魔お姉さんの熱い口で、シヨタ天使のち○ぽが撚られる。



おん
ん
ん

『あっ♥ あっ♥ やめてくださいっ♥ それっ♥ ダメですっ♥』

「出せなくてつらいのよねえ？ でも、やめてあげない♥
言ったでしょ、あんたのち○ぽは、もうあたしの物なんだから。
どう扱おうが、あたしの勝手なの♥」

『嫌ですっ♥ ま、まってっ♥ あっ♥ おち○ぽっ♥
痛くなっちやいますっ♥ も、もうっ♥』



『あゝ ～～っ♡ 止めてっ♡ 止めてくださいっ♡ だめえっ♡』

「クスクス♡ 馬鹿みたい♡ これ、あんたが逆らった時の
お仕置きにしようか♡ あんたが逆らう度に、射精させずにち○ぽ
虐めてあげるから♡」

悪魔お姉さんたちは、昔からの敵である天使たちに、一切の容赦など
してくれないのだった。



どれだけち○ぽを虐められても、射精することができない。
これは、ち○ぽへの性的な刺激が、無限の拷問になる事を意味する。
しかも、天使も悪魔も、人間とは違って寿命がなく、首を切り落とし
でもしない限り、死ぬことがないのだ。

「人間と違って、天使をペットにすれば、一生遊べるもんね♥
これから、たっぷり“可愛がって”あげなきゃ♥」

『う…い、嫌ですっ！』

しかし、天界ごと支配されてしまったシヨタ天使たちに、
逃げるすべなどない



「嫌って言いながら、こんなに勃起させてちゃダメじゃない♥
ほんとは、お姉さんにたっぷり虐めて欲しいくせに♥」

フムム

悪魔お姉さんの豊満なおっぱいが、
ショタ天使のち○ぽを包み込む。

ムムム



「天使を虐めるのって、人間を相手にしてるよりずっとおもしろ〜い♥
私たちが倒さなきゃいけない立場なのに、発情しておち○ぽシコシコ
されてるのって、どんな気分?♥」

『あっ♥ あ♥
やっ、やめて…っ♥』

「大丈夫だって♥ どうせ、射精できないんだからさあ♥」

『おっ♡ おっ♡ い、イカせてえっ♡ イキたいっ♡』

「もう降参なの？♡ 我慢汁でぐちょぐちょにして♡
天使って意気地なしなのね♡ そういう子、可愛くて好きよ♡」



「だから、もおっと虐めてあげるわ♡
このまま、メスイキさせないで、一生我慢汁搾って弄んであ・げ・る♡」

悪魔お姉さんたちの非情さは、徐々にシヨタ天使たちのプライドや、使命感を挫いていく。

フフフッ

「かわいいおち○ぽ♥
いい子いい子してあげましょうねえ♥」



「ほら、いい子いい子〜♥」

『ひ…っ♥ くそっ♥ やめろっ♥ い、いつまでこんなこと…っ♥』

「ス、ス、ス」

「ズ、ズ」

「ズ、ズ」

「可愛いペットなんだもの♥
ずっと相手してあげまちゅよ〜♥
私たちに寿命なんてないんだし♥」

『うううっ♥ も、もう触るなっ♥ そこは…だめだって…っ♥』



「あらあら♥ お汁が出て来ちゃった♥ 気持ちいいのかな?♥」

『あっ♥ あっ♥ やめ…っ♥
も…イクら…っ♥』

「射精なんてできないのよ?♥
だから、ずうっとナデナデして
あげましょうねえ♥ クスクス♥」

ニヤニヤ

グイグイ

グイグイ

グイグイ

『いっ、いやだっ♥
もう…っ♥ やめろっ♥』

グイグイ

グイグイ

グイグイ



『あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああっ♡』

「空イキしてる♡
射精できなくて残念ねえ♡
でも、お姉さん君の事だあい好き
だから、ずうっといい子いい子
してあげたいなあ♡」

ウフフッ

『やめてっ♡ 許してっ♡
あっ♡ ひああっ♡
止めてえっ♡』

「ウフフッ♡
どうしよっかなあ♡」

お姉さんの優しげな見た目に騙されてはいけない。
彼女らは、純然たる悪魔なのだ。シヨタ天使たちに情けをかける心など
微塵も持ち合わせていないのだった。

天使たちの中には、生意気な者もいれば、従順な者もいる。
しかし、彼らはすべからず悪魔お姉さんたちの奴隷となるよりほかにはないのだ。

「いい子にしてた？」

『ふ、ふざけるなっ！ 悪魔め！ 俺たちをいつまでも支配できると思うなよっ！』

「威勢がいいわね♥ あんたって虐めがいがあるわ♥」



「でも、おち〇ぽ握られたら、男なんてみんな同じよね♥
無様に射精させられて、あたしたちに服従するしかなくなるの♥
しかも、天使には永遠の寿命があって、
おまけにメスイキの呪いまでかかっている♥
勝ち目がないと思わないの?♥」

『うっ、うるさいっ! お前らなんかに…っ!』

「あっそ。じゃあ、いいわ♥
遊んであげる♥」



「ほら、先走りでグチャグチャいってる♥
滑らかになって、さらに気持ちいいでしょ?♥
イカせてくださいってお願いしてみなさいよ♥
お尻の穴でメスイキさせてください、ってね♥」

『ふざけっ♥ とっ、とめるよっ♥ もうやめっ♥
おお〜っ♥ な、なんだよこれええっ♥』

射精直前で、激しく手コキをされても
どうしても射精することができない。
結局シヨタ天使たちは、悪魔お姉さんに服従し、
メスイキを懇願するしか射精する手段はないのだった。



悪魔お姉さんたちは、様々な方法でシヨタ天使たちを調教する。
何も、射精を我慢させるだけが調教の方法ではない。



「ぼく、今まで一度も射精したことがないの？」

天使って、本当に初心なのねえ♥

人間でも、そんな子滅多にいないわよ？♥

じゃあ、お姉さんが教えてあげるから、気持ちいいことしましょうか♥」

「今の天使くんたちは、お尻でしか射精できないの♥
エッチな身体よねえ♥ ほら、ここ、気持ちいいでしょう?♥」



『ひああっ♥ やっ、やめて…っ♥』

「大丈夫よ♥ 痛くなんてないんだから♥」

「おち○ちんと、お尻の穴、どっちが気持ちいい?♥」



『どっ、どっちも嫌ですっ♥ め、抜いてっ♥ 触らないでくださいっ♥』

「フフフフ♥ 素直じゃないのねえ♥ じゃあ、試してみましよう?♥
ほらほら♥ シコシコ、コリコリ…♥」



「初めてですごく感じてる♥ いやらしい子♥ 天使のくせに、こんな
だらしないアナルでいいのかしらねえ♥
これは、たっぷり射精させて、お仕置きしてあげなきゃねえ♥」
悪魔お姉さんによる調教は、射精を許されてなお、地獄のようである。

悪魔お姉さんたちは、シヨタ天使のことを、ペットか玩具としか考えていない。
なので、彼らの身体をどう開発しようと、作り替えようと、お構いなしである。

「よお、ポチ。待ってたか？ よしよし、今日も可愛がってやるよ」

この天使などは、まさに犬扱いで、容赦ない調教を受けているようである。



「はは、もう腕まで入るじゃん♥
ち○ぽから汁垂らして、変態になったもんだよな♥
気持ちいいのか？
口で言ってみろよ」



『き、気持ちいいです！っ♥』
「はっ。コイツマジで変態だな」
『ご…ごめんなさいっ♥』

『あゝあゝあゝあゝ ~っ♡ イグっ♡ イキますっ♡ らめええっ♡』

「アハハハッ♡ すげー感度いいな♡
フタナリの友達が喜ぶわ、これ♡
後で、調教の成果を仲間たちに
たっぷり見せてやれよ、ポチ♡」

『もっ♡ イグっ♡ ああんっ♡
許してっ♡ ダメですうっ♡』

悪魔お姉さんたちにより、
天使たちは見世物にされ、
娯楽として消費されていくのだった。



シヨタ天使たちは、悪魔お姉さんたちによって、玩具にされている。

しかし、それは、単なる加虐心を満たすためだけの事ではない。

「射精しないおち〇ぽって、便利よね♥
だって、ずっと勃起してられるんでしょ？♥
永遠にセックスしてられるじゃない♥」

悪魔お姉さんたちの底なしの性欲は、人間の男では満足させられない。

その点、メスイキの呪いをかけられたシヨタ天使たちは、
アナルを弄ってもらえない限り勃起し続けることしかできないので、
生きたデイルドとしてはもってこいだ。



「生きてるし、反応もいいし、デイルドとしては最高よね♥
さあ、ちゃんと私を楽しませてよね?♥」

『あっ♥』

ウフフフ

天使はみな童貞なので、
豊満な肉体のお姉さんとセックスなど、
当然したことがない。

フッ

あ

ただでさえ興奮必至の状態、ち○ぽははちきれんばかりにいきり
立っているのに、絶対に射精することはできないのだ。

「あん♥ すっごく硬くて熱い♥ 興奮してビクビクしてる♥
かかわいい♥」

『はっ♥ はっ♥
だめっ♥
すぐ…イキますうっ♥』

ク
ス
ク
ス

「イツてもいいのよ?♥
できるものなら、だけど♥」



「ほら♥ イクの?♥ イッちゃう?♥ クスクス♥
射精できないよねえ♥ こんなに気持ちいいのに♥」

『うああああっ♥ もっ♥ もう止めてっ♥ おち○ちんがっ♥
だっ、出したいのにいっ♥』

「だ〜め♥

お姉さんが10回イクまで
許してあげない♥
先は長いから
がんばってね♥
といっても、
君は無様に勃起して、
お姉さんのおま○こに
ご奉仕することしか
できないんだけどねえ♥」

シヨタ天使たちの、
天国のような地獄は、
まだまだ始まった
ばかりである。



悪魔お姉さんたちは、呪いによってメスイキさせない限り絶倫にされてしまったシヨタ天使たちを、自分たちの性欲処理に使用する。

人間を捕まえてくるよりも手軽で、ペットの天使は自分専用なので、好きに開発もできる。

また、ご主人様と奴隷という関係性が定着してしまえば、シヨタ天使に必死のご奉仕をさせることもできるのだ。

「いい加減、諦めなさいよ。いつまでも反抗してるから、苦しい目に遭うんでしょ」

『ふ…ふざけるなっ！ 悪魔になんか、屈しないからなっ！』

「ああ、そう。ならいいのよ。
あんたなんて、ただのデイルドと変わらないんだし。
それなりに扱うからね？」



「でも、あんたはいつまでたっても射精できないけど♥
ま、デイルドが射精なんてする必要ないもんね♥」

『あっ♥ くそっ♥ ど、退けよおっ♥』

「デイルドがしゃべってんじゃないわよ。
あんたは黙って、ち○ぽ勃起させときなさい」

『はっ♥ はっ♥ お、覚えてるよっ♥
自由になったらお前なんかあ…っ♥』

「口では粹がってるのに、
ち○ぽはもうビクビクしてるわよ?♥
あ～あ、だらしない♥」



『あっ♥ あ♥ イク♥ イッてるはずなのにっ♥ もうやめろおっ♥』

「イキたかったら、何ていうの？
誰に頼んでるか、ちゃんと口で言いなさいよ♥」

『いや…だっ♥ あっ♥ ああっ♥』

「ご主人様、でしょう？♥
ご主人様、メスイキさせてくださいって
言ってごらん？♥」

『ひいっ♥ ち○ぽっ♥ ち○ぽ壊れるっ♥
止めろっ♥ もっ、嫌だああっ♥』



『うおおお～っ♥ い、イキたいっ♥ イカせてっ♥
も、もうイカせてくださいっ♥ ご、ご主人様っ♥
ご主人様っ♥ イカせてっ♥ メスイキさせてえっ♥』

「じゃあ、あと20回あたしを
イカせられたらね♥
あんたが腰振るのよ?♥
イキたいんでしょ? いいわね?♥」

『うううっ♥ はっ、はいっ♥
やりますっ♥
何でもしますからっ♥
い…イカせてえっ♥』

一回の射精のために、何度も苦痛と快感を味わう
羽目になろうとも、理性を奪われた天使たちに、
選択肢など残されていらないのだった。



悪魔お姉さんたちのおま〇こで躰けられたシヨタ天使たちは、次第に、生きたデイルドであるという自分の立場を受け入れ始める。

反抗すれば、射精ができない無限の逆レイプ。
しかし、従順に振る舞えば、悪魔お姉さんの気まぐれによっては、メスイキさせてもらえて、射精させてもらえる可能性も、ないわけではない。

なので、シヨタ天使たちは、悪魔お姉さんたちが言うとおりにご奉仕をして、悪魔お姉さんに満足してもらおう事こそが唯一の救済だと悟るのである。



「ウフフッ♥ 今日は何んだか素直じゃない♥
お姉さんのおま〇こが待ちきれなかったの?♥」

『は…はいっ♥』

「じゃあ、腰を振って
私を満足させなさい♥
満足させられたら、
メスイキさせてあげるから♥」

『が、がんばりますっ♥』



「あんっ♥ はっ♥ いいわよっ♥ もっと腰振りなさいっ♥」

『はっ、はいっ♥』

「熱くていいっ♥
生身のおち〇ぽ最高っ♥
ああんっ♥
すぐにイッちゃうっ♥」

ご主人様を満足
させられれば、
次は自分が射精させて
もらえるかもしれない。
シヨタ天使は、
欲望を吐き出すために、
必死に腰を振る
ことしかできない。



「イクうんっ♡ おふっ♡ おほっ♡ き、きもちいい…っ♡」

『あゝあゝあゝ～っ♡』

絶頂して強く締め付ける
悪魔お姉さんのおま〇こに、
シヨタ天使は
息も絶え絶えだ。

『出させてっ♡
出させてくださいっ♡
も、もうイキたいっ♡』

必死に懇願するが、
悪魔お姉さんは自らの快感に
集中し、聞く耳を持たない。

『もっと欲しいっ♡
だめ、止まらないっ♡』

『ま、まってっ♡
ぼ、僕はまだ…っ♡
うああっ♡』

メスイキ射精をさせてもらえず、
シヨタ天使は絶頂付近のち〇ぽを
おま〇こで搾られるづける。

結局、どれだけご奉仕しようとも、お姉さんたちにとっては、
シヨタ天使など都合のいい肉棒程度の存在価値しかないのだった。



シヨタ天使たちの中には、フタナリの悪魔お姉さんのペットにされた者もいる。
そういうシヨタ天使たちは、悪魔お姉さんにアナルでご奉仕するかわりに、いつもメスイキさせてもらえて、一見幸運なように見える。しかし、その実態は、やはり過酷なようである。



「お姉さんのおち〇ぽ、待ち遠しかったでしょ？♥

お留守番のご褒美に、アナルをたっぷり可愛がってあげる♥」

『ひあっ♥』



フタナリお姉さんたちのち〇ぽは、どれも巨根であり、シヨタ天使たちは雄としての機能で勝てずに、屈辱を味わうことになる。

「お尻が気持ちいいね〜♥ 粗チンからお汁が零れてる♥
お尻の穴で、女の子みたいにアンアン泣かされて、
もう男の子失格だよねえ♥」

『ちっ、違いますっ♥
これ…はあっ♥
あっ♥ あんっ♥』

「何も変わらないでしょ？
お姉さんたちに負けちゃって、
フタナリち○ぽでアンアン
喘いで、もう天使も男の子も
やめなきゃねえ♥」

『ううう…っ♥』

支配者然としたお姉さんの優越感に満ちた言葉を、シヨタ天使は
否定しようがない。

「ほら♥ お姉さんのち○ぽに負けを認めて、射精しなさいよ♥
イけ♥ イけっ♥ 中に出すわよっ♥」

『おほおおおおっ♥』

「あはは♥
悪魔に種付けされちゃった♥
もう天使失格♥
雄としても終わり♥
これからは、私のペットとして
毎日私のち○ぽに
ご奉仕してればいいのよ♥」

どこに行きつこうとも、シヨタ天使たちに平穩はないようである。

フタナリ悪魔お姉さんたちは、悪魔の中でも比較的上位の者達である場合が多い。

それは、人間の男をより墮落させるからであるが、相手が天使であっても、それは同じことだ。

「メスイキするって、雄としてはもう最下位の存在って感じだよなあ？♥
しかも、そうしなきゃ射精できないとか、どんな気分なんだよ？♥」

悪魔お姉さんは、言葉で精神的に獲物を追いつめる。



「敵にケツ掘られて射精するとか、マジであり得ないだろw♥ なあ、完全変態じゃん♥」

『だ、黙れっ♥ こ、これは、お前らの呪いのせい…
うああっ♥』

「あははっ♥ 突っ込まれただけで感じてるのかよ♥
じゃあ、抜き差ししたら、どうなるのかなあ?♥」

『よ、よせっ♥ やめる…っ♥』



『あっ♥ あっ♥ あっ♥』

「ちょっと前立腺突いただけで、もうイキそうじゃん♥
ヨイツマジで変態だな♥ 変態君のアナル、
物欲しそうにギュウギュウ締め付けて来るんだけど?♥」

『ち、ちがうっ♥ 抜けよっ♥ もう抜けっつてえっ♥』

「ダメだ、中に出してやるよ♥
お姉さんの熱い精液、中に出して欲しいだろ?♥」

『嫌だっ♥ やめるっ♥ もうやめろよおっ♥』





『ふあああああつ♥』

『アハハハ♥ 自分もイッてんじゃん♥
『タナリち○ぽ大好きなんだな♥』

『ちが…っ♥ も、もう許して…っ♥』

『何言っでぶだ、まだまだ可愛がってやるよ♥
『まだまだ何回も精液中出してやる♥』

『やらっ♥ も…無理だっでえ…っ♥』

シヨタ天使たちは、どんな悪魔お姉さんに飼われようと性的拷問からは逃れられないのだった。

シヨタ天使たちも、連日射精禁止とメスイキ調教を受けていると、次第に射精の魅力に抗えなくなっていく。

体は敏感になってより刺激を求めるし、快楽拷問の辛さと、射精の快感を秤にかければ、悪魔お姉さんたちに従った方が得だということは、猿でもわかる事だ。



「悪魔お姉さんのフタナリおち○ぽ、欲しいよね?♥」

『お、おち○ぽ欲しいですっ♥
い…挿れてください…っ♥』

うっ…

悪魔に従うことは、天使の本能に反する。しかし、悪魔お姉さんたちは、快楽と苦痛によって、それを捻じ曲げてしまうのだ。

「おねだりできてえらいねえ♥、はい、ご褒美のおち〇ぽ♥」

『ひいっ♥ あ…
ありがとうございますっ♥』



アッ

従順に従えば、飴を与える。そうやって、シヨタ天使たちの警戒心を解き、自ら服従して飴をねだるように仕込んでいくのだ。

「フフフ♥ きもちいいねえ♥ お姉さんのおち〇ぽ好き?♥」

『はっ♥ はい♥ す、好きですっ♥ おっ♥ あっ♥ きもちいいっ♥』



「じゃあ、次はなんておねだりすればいい?♥ちゃんと口で言ってみて?」

『な、中に出してくださいっ♥ お姉さんの悪魔ザーメンっ♥ 天使のケツま〇こに注いでくださいっ♥』

「良く言えました♥ すっごくいい子ね♥ じゃあ中出ししてあげる♥」

『くはああああっ♥ すっ♥ すごいう♥ きもちいい♥
い、イクううう♥』

くはああああ

「ああん♥
この子すっごい
締め付けて来るっ♥」

『もっと…っ♥
もっと犯してっ♥
気持ちよくさせてくださいっ♥
メスイキさせてえっ♥』

ドビドビ

ブルブル

悪魔お姉さんの精液を吸収して、シヨタ天使は天使としての力を
どんどん失っていく。しかし、ペットに成り下がった今、天使の力など
無用の長物だ。そんな事よりも、快楽を貪り、悪魔お姉さんに気に入られ
可愛がってもらう事の方が、何倍も大切なことなのだった。

シヨタ天使たちは、辺境に住んでいたものまでみな一人残らずあぶり出され、囚われた。

今や、天界は完全に悪魔お姉さんたちの手中にある。

「天使をペットにしたから、次は人間界を襲おうかな♥

でも、怪我とかしたくないし、天使をあたしたちの兵隊にしちゃうってのはどう?♥」

『そ、そんなこと、皆がするわけ…っ』



「断るのなら、それでもいいのよ?♥ あたしたちは、従いたくなるまであんたたちで遊べばいいんだからね♥」

『いっ♥
こ、こんなことをしても、
人間との戦に手は貸さない……っ』

ズイン

「そうかしらね?♥
じゃあ、体に聞いてみようか♥」



「逆らうの？ 従うの？ 早く決めないとケツま〇こが使い物にならなくなっちゃうかもね♥」

『おっ♥ おっ♥
ぜ、前立腺っ♥
潰れるっ♥
だめっ♥ そこだめっ♥
んあああっ♥』

「じゃあ、あたしたちの
手駒になりなさいよ♥
人間は天使を信用してるんだし、
あんた達が姿を見せれば
勝手に服従するんだからいいじゃない♥」

『うっ、うううっ♥』

「まだいう事聞かないの？
前立腺が壊れちゃってもいいのかしらねっ!」



『あがあああつ♡ まってっ♡ まってっ♡ なっ、何でもしますっ♡ いう事聞きますっ♡
つ、突かないでっ♡ イッてるうっ♡』



あがあああ
あがあああ

「フフフ、それでいいのよ♡
でも、お姉さん興奮しすぎちゃった♡
止められそうにないから
もうちょっと付き合ってもらわよ♡」

『そんなっ♡ むりっ♡
死ぬっ♡ 死んじゃうっ♡
い、いう事聞くって言ったのにっ♡』

シヨタ天使たちの受難は、終わるところを知らないようだ。

天使たちを全員服従させ、人間界を襲う目処もつき、
悪魔お姉さんたちはすっかり満足している。

かつては天使と呼ばれ、人間を守護していた者たちは、
今や悪魔お姉さんたちのペットとなり、快楽を提供するだけの
存在になり果てた。

「ペットを可愛がってあげなくちゃ♥
もちろん、ちゃんにご奉仕もしてくれるのよねえ？♥」

『は、はい…』

「どこか不満そうね。
毎日悪魔ザーメンを注いであげてるのに、
まだ天使のつもりでいるのかしら？」

『…そ、そういうわけじゃ…』



「隠しても無駄よ♥ 従順になり切っていない天使には、
自分の身分ってものを何度でも思い知らせてあげないとね♥」

『あうっ♥ も、もう分かってますっ♥
反抗なんてしませんっ♥
さ、逆らったりしませんからっ♥』

「口では皆そう言うのよ♥
だけど、心の底から服従したいって
思わせなくちゃ、
支配にならないじゃない?♥」

悪魔お姉さんは、
前立腺を執拗に突き、
責め始める。



「おねだりしなさい♥ フタナリ悪魔ち○ぽに、どこをどうして欲しいの？ 変態墮天使くん♥」

お姉さんに焦らされ、意地悪く聞かれて、
快楽に慣らされ切ったシヨタ天使は
必死に懇願することしかできない。

『い、イカせてっ♥
前立腺こすって
メスイキさせてくださいっ♥
い、イキたいんですっ♥
我慢できませんっ♥』

「じゃあ、中に悪魔ザーメン
出しちゃうけど、いいの？♥」

『な、中に出していいからっ♥
い、イカせてくださいっ♥
お願いっ♥ はやくっ♥
も、もう我慢できないっ♥』

惨めな懇願だと分かっているが、体は快楽に逆らえないよう作り替えられているのだ。その原因が、悪魔ザーメンだという事も、シヨタ天使には薄々分かっている。しかし、その上でも懇願せずにはいられない。

『くはあああっ♡ き、きもちいい♡ ありがとうございますっ♡』

「あはは♡ お姉さんの悪魔ち○ぽ
好きになった？♡
これからも、毎日おち○ぽで
遊んで欲しいよねえ？♡」

『は、はいっ♡
おち○ぽ大好きですっ♡
もっと気持ちよく
なりたいたすうっ♡
め、メスイキさせてくださいっ♡
ありがとうございますっ♡』

「ウフフ♡
天使なんてチヨ回いわねえ♡
これからも、悪魔ち○ぽの
生オナホとして使ってあげる♡」

くはあああ
くはあああ
くはあああ

びん

びん

ブクブク
ブクブク
ブクブク

びん
びん
びん

びん
びん
びん

悪魔お姉さんとシヨタ天使は、今後も共に楽しく暮らすことだろう。

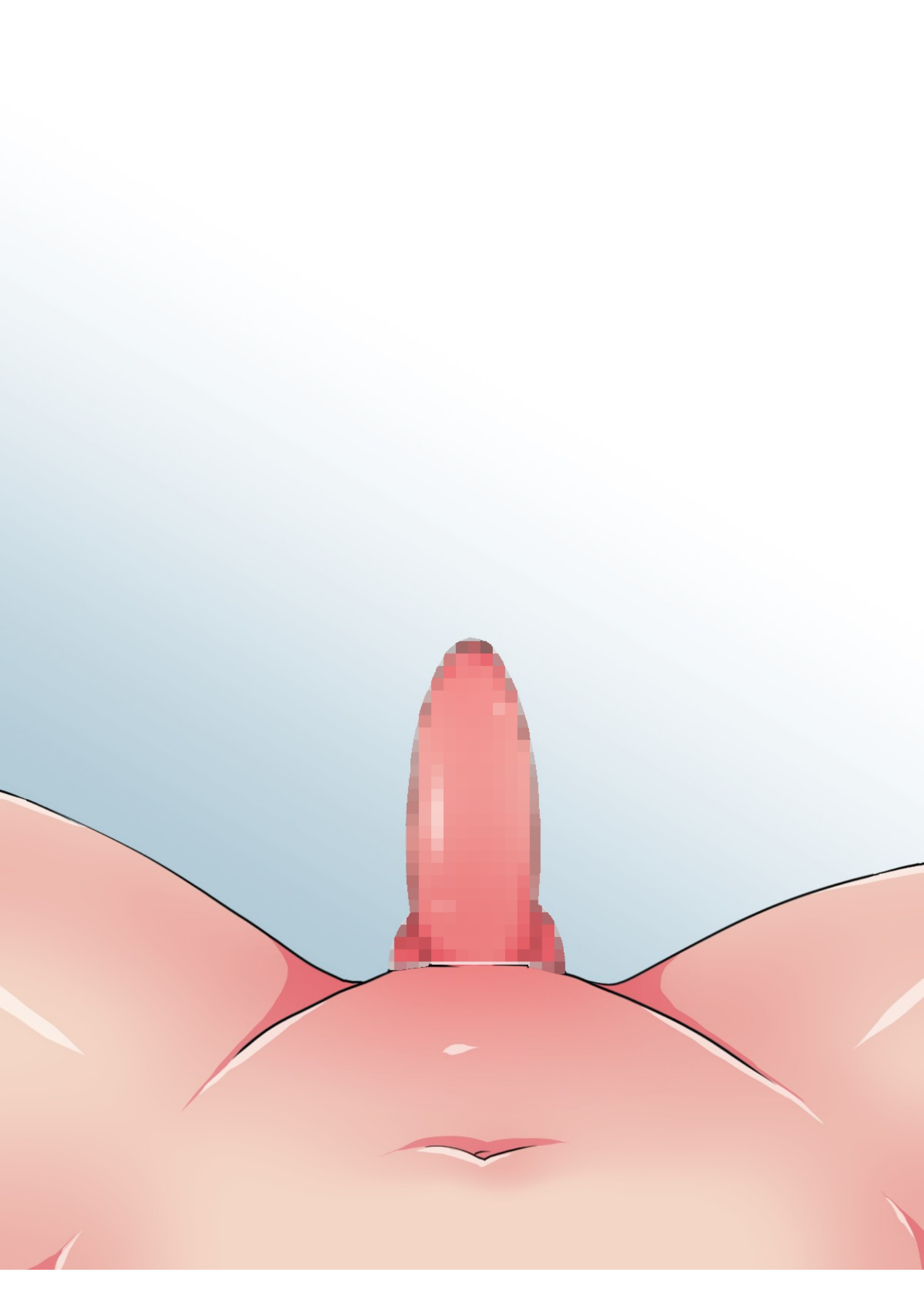


!!!











おはよう





ぐわんぐわん
ぐわんぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわんぐわんぐわん

ぐわんぐわん





ふんふん

ぐわんぐわん







レム



フス、フス

チリッ

チリッ

M





ゴクゴク

あー

あー

ゴクゴク
ゴクゴク
ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク



アハハハ

































アッ

ズンズン

あ、

ズン!











ぐわん
ぐわん

ぐわん
おほい

ぐわん

ぐわん

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ

おあおあ
おあおあ



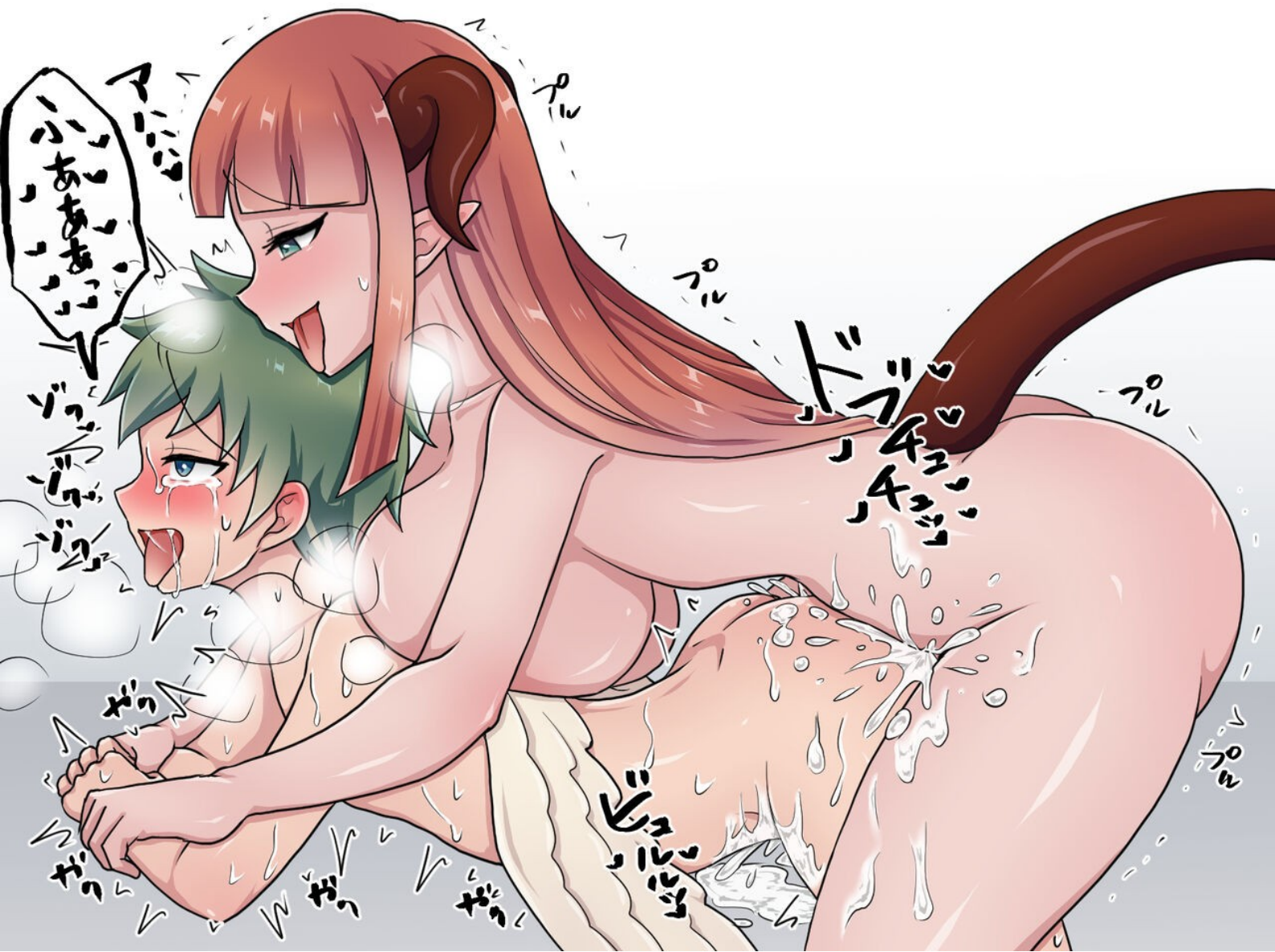


















はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ
はぁあぁあ

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ
ぐちゃぐちゃ

はぁあぁあ

はぁあぁあ















